

^ 13  
3112  
2



忠孝潮來武志卷之二

東都

談洲樓

馬馬著

諷

柳よく直なれ柳いやる風も形びかんせ。

爰に下総の國印幡郡。佐倉の町。柳屋勘兵衛といふものあり。先祖を  
 総列真里ヶ谷の家臣。昔柳何某といふ浪人民間。お住む貯めねはほりせて  
 田畑のりとも。未み商人やなりしとかや。されど今見世繁昌して。何員兩替兵  
 服小間物。高内。謙約を専らとしけれ。ば。他家富はる。され。形も勘兵衛と  
 て今年二十一歳に。なる。け。親み劣らぬ。正直のといわれ。又。柔和。ゆして  
 人。ふ。の。み。におよぶ。は。人。是。を。譽。は。れ。は。ぬ。兵。衛。年。も。六。十。に。あ。り。の。ち。後  
 の。仕。送。り。米。穀。の。賣。買。と。倅。勘。藏。に。預。け。見。世。と。子。飼。の。番。頭。伊。平。次。郎。の  
 賄。自。分。は。令。浪。の。出。入。の。あ。ら。く。と。し。し。と。は。の。れ。時。へ。夫。婦。後。生。を。保。ぐ。

くじりけ。爰に風間亭菴と云ふ出入の醫者の於て耐事りて四方山のその語  
をりけ。其の語を清くして人々は驚かすも徒然なるものなり。我亦幼年の  
より家業に情出。親より譲り受て居る。元上一倍おぼし。今は何の苦勞  
斯く斯く隱居同前に相なり。後生願の外化事は。残念なるものなり。耐事  
年毎に金銀の集れ。こと次樂み。且舞茶の湯は春とく。珍びせめ  
て狂歌詠諧。さして。あてもおぼえ居る。は老のたのしみもなげ。たのしみ  
筭盤を枕。六十年。采菴の夢も。さる。り。け。は成ほど。夫と。あわい  
なごも。御同前。醫論講釋の席。さく。え。若れ。友。あ。否。は。れる。こと。あ。れ。を  
此。ど。は。庄。屋。の。ほ。く。將。基。瓜。は。罷。居。る。基。將。基。へ。い。く。は。や。と。い。ふ。誠。お。基  
の。ゆ。幼。年。の。耐。寺。あ。て。手。あ。れ。際。傍。俗。集。後。て。基。と。鼓。樂。次。常。く。え。り。石  
れ。鼓。より。臥。覺。故。同。友。連。と。戲。ふ。ち。な。じ。む。れ。が。後。六。年。増。え。人。と。鼓。ふ。

勝り。有り。其。道。の。先。生。と。云。此。小。兒。惜。り。お。出。情。さ。る。お。あ。る。は。性。は。名。の  
は。へ。の。れ。基。ら。ち。と。呼。ぶ。と。云。ら。は。是。來。有。り。れ。一。人。子。の。我。が。故。親。も  
これ。ゆ。れ。事。形。く。打。す。は。ぬ。も。も。や。親。の。言。葉。瓜。消。と。云。上。も。讓。は。は  
より。多。分。お。な。れ。は。老。れ。慰。是。な。れ。は。は。それ。お。は。幸。の。その。有。り。の。經。貨。物。の  
流。の。中。に。盤。石。と。も。に。結。搦。な。る。不。出。り。賣。拂。も。あ。る。は。も。在。所。お。不。用。け  
その。故。その。價。も。下。垂。な。れ。先。見。合。せ。せ。と。と。下。女。お。け。け。や。う。く  
見。せ。り。取。寄。け。は。は。は。に。實。も。貴。人。より。洋。領。の。不。々。れ。う。は。は。と。寺。院  
へ。奉。納。の。物。も。い。つ。は。は。勤。ま。精。を。盤。お。向。ひ。誠。お。え。く。う。ち。り。お。さ。る。も  
お。く。忘。ま。さ。り。其。え。様。も。は。慰。な。ら。御。指南。な。れ。下。さ。り。と。あ。れ。は。  
亭。菴。も。え。より。望。所。あ。は。し。以。恭。ら。ら。ち。な。は。と。も。當。所。へ。ま。り。相。あ。り。お  
く。は。振。あ。て。ら。ち。と。云。は。指。南。と。い。は。と。し。り。中。は。徒。然。の。折。柄

るとは心相多にゆかり成色と夫より其盤よむ久の勤を情も五十年  
 捨おさじつと形ればとて始九日空と致され亭菴負け故とて五日  
 ほどおちなり亭菴をうく勝とて夜にゆりて又その後身りてうみ負  
 たりゆ多く一月むかりの内おえを後身の友とぞなりぬあうれ小形勤  
 と家業にのみ出情して行徳川岩に同至へ米穀を送りその仕切令  
 取り益を比よりゆくと支度いじりて同至の主足なとて最  
 早ハの鐘も今夕をさる夜おから道もぬは聖日けりおち多といふ  
 五月の始附まのしじければ大和田までありて泊るべと暇乞てとら出  
 急にゆく道茨木村といふ所にておとりの旅僧一人年のとほ三十のまらた  
 又へ音懸のつと肥満とれが鼠本給の草物小衣の袖とひとひ前頭陀  
 袋竹篋をさし横長包及び脊負とれが跡よりの勤職をゆけ此の村ひ

そこえのあゆみは中といふ袂かえればはとて道ゆ急取落したる。こゝ  
 ばと清とる夫より言かして行はどん。柳もは出家とほあ何國より何  
 かとけ通りと同いふ。拙僧が生國ハ越前初年此附榮平寺にて傍と成  
 十七女の耐より諸國雲水の遍参いじ。夫より鎌倉の建長寺あて後傍  
 を勤れとて五年此やど我法類の知音ハ総小金の萬満寺にゆりある  
 ゆゑあゆみおれ序大和田の宿に由縁の者おも達りたり。今宵と夫とて  
 はのりなり。そのえあは又何とては通りぬれ中といふ勤業ありとあはひ  
 拙者と伏倉の町れ者にゆくい。行徳辺へ用事ありとほのり。節句は  
 の儀と申しすしも早くゆるとなら出大和田泊りと存るなりと云え  
 ほかの僧伏倉と仰ぬれば拙僧もあち人あり。柳屋勤兵衛どのとや所仁  
 法な知ぬれとて同。その勤業こそ我木親あてはたぬ何とてはとて

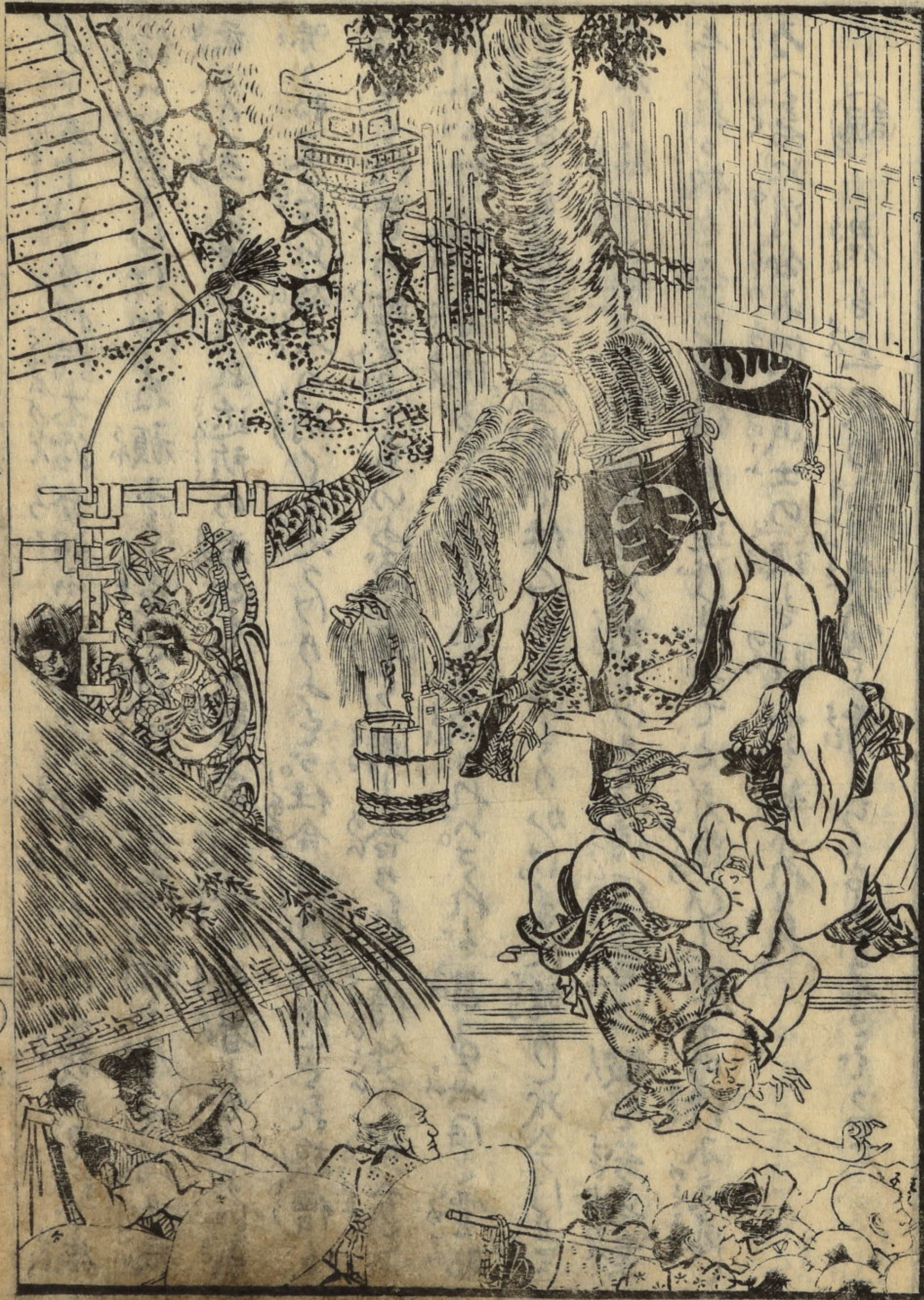


のやとしくければ。叔と其け子息あくるけられ。愚僧先年小令を寓居  
 の耐寺院へもまのれ折うははつちがうりじにたれるもめりじがや。十  
 年條とちげえゆとら。勘藏笑く滅小衆縁檀方の儀なれば。たやう  
 こそあれは。只今目おかたれも。法縁のゆらたきしるふんと互おそ  
 置なく。語り合く行むに。船楫の宿おそれ。かの僧些やらたき人用  
 足行んとした。勘藏もか。とれ茶店も休ミけれ。こに世次雲助の駕昇  
 二人一盃の餘醜瀧お肘をほくらと。伏居られ。傾て起上り。勘藏はほら  
 あり。大和田へ戻りか。と價と安くほら。じとら。我ホハ成田番詰の  
 そのあてへ。毎度往來され。商人なれ。をあたにおら。とく。ゆも  
 足悲をあり。多とす。めな。ら。じとら。形あて。幼義が腰に。床机  
 の端へ二人の腰うち。かり。せらにす。ひれ。ゆる。は。と。立られ。かの床机

行増を移く二人もか。と。轉落れ。胸お記く。腹くら。駕に。ま。び。の。ぬ。ま。
 の。と。何とて。怪我な。せ。と。経。り。掛。り。け。れ。和。か。よ。そ。れ。へ。其。方。の。あ。や。り。
 用の物を誣く。いふ。い。急に。取合。ど。立。り。け。ら。う。と。い。も。合。点。せ。と。無。二。マ。
 村。の。茶。屋。の。亭。主。と。兼。と。も。い。れ。ら。う。道。連。の。傍。も。出。身。り。て。侮。ふ。了。簡。と。頼。
 中。と。い。は。ぐ。ふ。錠。と。し。も。中。に。入。り。て。突。退。く。一。人。の。悪。者。幼。義。が。胸。
 ぐ。取。拳。を。振。上。ら。ん。と。い。れ。を。才。か。ら。と。拍。子。と。め。れ。と。轉。て。後。居。小。胸。と。
 打。つ。種。一。人。の。是。と。い。ふ。棒。組。と。死。入。り。ぞ。か。れ。人。殺。く。と。わ。ち。く。声。あ。り。け。れ。
 の。人。を。毒。を。そ。れ。旅。僧。も。氣。の。毒。お。ち。り。水。な。ど。吞。せ。く。介。抱。し。幼。藏。
 向。ひ。何。と。い。は。我。お。何。と。か。の。者。に。い。は。れ。此。方。お。わ。り。て。な。く。向。ひ。な。と。い。
 ぶ。た。事。お。い。は。い。酒。お。酔。れ。と。い。え。て。酔。る。也。な。れ。は。い。こ。は。ぞ。の。命。
 び。に。及。ぶ。こ。の。あ。れ。は。じ。け。と。堪。忍。め。ら。し。親。と。や。と。れ。と。泣。世。の。障。り。も。

なほ今日は休て養生いさせ。其價少くもと鳥目と百文  
取いじ愚僧も道連のりよ云わが。油の振合も他生の縁えたるを  
詫言しはとれれば此坊主は人を空戯めさせ扱ひす。命が三百文あて  
買う物な安き物なり。令げらるは百文も取らぬ出家の勘さた  
邪魔がしてけがはられまを法華經の高ゆると。旅僧もさる人。愚人  
小對して言葉なれば價とさる。往ふとさる。得をりた上は足悲もは。  
命も危しとくは我目前小一療治してえんとや。若くは指を竹筒あり  
と力に任せいと打むく。記より何の料めつ打むと。何料とは  
えあんと腰骨背の用捨り。けがはらふ打たれぬ。支え一人も側  
杖な死例。已も一所小庄を方へ引連。街の正相たさんと云れて。二  
とやうく此場を遊去りけれ。妙花の大きにほび不事れ災難いふ有

とと存せしと。影小仍安堵いさ。一札を演進は茶屋の亭主  
もほひ扱氣味のよ。車うりま。あらは東海道のあまは。者あ。近比  
の邊小ありて旅人と。えれを無理といかけ。ゆり中車度なり。宿充  
へもやして所を返拂くと存せれ。後日れ仇を忘。我人ともに扱ひ。れ  
ほこりに。津僧換の影。必事は徳。小の。と。は。の。傍。を。徴。笑  
あてい。あ。珠勝。な。死。傍。の。振。糸。か。と。ら。い。く。お。ぼ。え。ん。が。れ。悪。人。の。法。戒  
と。つ。く。説。事。あ。ら。ん。だ。え。れ。ば。佛。小。弥。陀。の。利。劍。と。い。ふ。こと。の。り。ひ。と。大。悲  
れ。弓。に。智。恵。の。矢。矢。他。又。外。小。を。忿。怒。の。相。を。現。む。と。い。ふ。も。内。小。を。慈  
悲。心。め。く。み。た。ま。う。は。大。日。大。聖。不。動。明。王。惡。魔。降。伏。し。た。ま。ふ。是。と。い。ふ。佛。の  
方便なり。似合ね傍の腕。て。穴。賢。人。か。き。り。あ。は。の。お。も。や。日。も。西。小。傾。け  
は。つ。ぎ。の。そ。が。ん。と。夕。間。ぐ。道。妙。花。と。流。も。亭。主。に。換。授。して。打。連。と。い。ひ。く。





よ。五十ばかり侍本合羽小旅出たら持返つたは不頼成えれを旅  
 傍の坐かとしけ。知らぬ顔もく急ぎ行侍を茶店に休し居た所最  
 希より立ち寄りたは近所の者ども。大勢あて扱今の悪者どもはよい氣  
 味うね又若れ旅人の折くえ入りりよまが。仕合道はれゆされ旅僧を  
 はこくに昔の辨考ともいふに。斬し合ひを侍は。只今こ  
 許おあつて何そは満ちてもわりしやと同れが。されが其の此月と雲  
 の溢者ども。旅人は喧嘩を仕つけいてゆきかけ。手に餘りな今に  
 ぬたし旅傍のかげあてと。始終成斬しけ。侍何う眉に皺を寄。委  
 ありれが。扱も今の旅僧も。道はとあてと。牙落ひしてその候不え  
 及へ急だ。外公何う武士の沢と後あぞ。知られれ。

諷

君も之夜の二日月うらや宵よりふととささむと

斯く勘藏と。不事の難儀を道はしるも。誠ふ貴僧のほかげの  
 ひと。海をぬりた道はれぬ。一里も。頃遠寺は鐘おひも。つと  
 けと。ば。一家お立ちより用意の手提灯お。つつけ。おろく。行道とじ。  
 家居まが。た野原多し。はれが。東南に。検見川馬加里。うの。あの手拍の  
 ほく。りれ。や。あやみ。か。み。と。緑。し。ふ。葉。北野。東金。八幡。保田。加知山。都  
 上総。房州。小限り。西北。あ。は。白井。鎌ヶ谷。松戸。我孫子。小金ヶ原。下総  
 常陸。お。至。り。て。ハ。九。数。百。里。餘。り。曠。々。と。して。り。び。と。ぞ。と。草。北。由。緑。も。訪。徒  
 ね。と。り。ん。足。も。ほ。げ。た。の。原。比。も。五。月。の。始。つ。る。蓮。菖。蒲。が。か。れ。鎌。う。木  
 賊。お。か。け。し。三。日。月。の。曇。が。ら。が。れ。鼻。月。の。空。小。雨。も。そ。よ。と。吹。風。小。野。飼。の  
 駒。の。い。ろ。く。声。も。又。曲。者。の。待。伏。や。あ。つ。らん。か。と。そ。ろ。ろ。お。勸。花。を。お。行  
 躓。れ。持。た。れ。提。灯。消。け。と。も。足。り。と。と。し。道。な。れ。ハ。浦。二。十。町。経。た。と。り。て。

松の大木の有りたるあり。かの傍声くけ。暫く待たせんと脊負され包成  
 脱し中より袋入入れ太刀一振をとり出し。腰おに。最前の奴原もや  
 待たせんと難し。其時に餘り。や命の暇をせんより。外は氣  
 ばいひのれま。と拵火おたごと吹付おと先えし。居りしが。頓く竹昆  
 びまうと。松の根一ツ打つ。け。相圖やのり。ん。以。前。の。二。人。木。陰。より。立  
 出た。右。も。多。て。動。蕨。が。手。次。を。と。取。ら。何。も。と。し。る。同。も。多。く。旅。傍。の。動。蕨  
 が。前。へ。廻。れ。と。え。し。が。た。ら。ほ。ら。服。を。棄。り。一。人。小。渡。と。扱。を。同。類。お。て  
 のり。た。れ。う。出家。と。お。り。ひ。由。断。せ。し。の。残。念。と。し。は。わ。が。笑。く。汝。我。を。誠。の。出  
 家。と。あ。ら。う。や。我。も。む。し。し。は。由。の。れ。武。士。荒。良。雲。八。と。し。者。お。り。時。前。と。行。て  
 旗。上。せ。ん。と。大。望。の。企。め。れ。ば。用。金。の。集。ん。ぬ。山。城。夜。盗。と。仮。の。渡。世。所。詮。生  
 金。中。の。ま。り。終。今。正。辨。を。許。せ。ん。と。僧。帽。子。か。な。ぐ。り。す。ら。と。ば。赤。慈。れ。月。代

と。と。の。髪。猛。虎。の。あ。れ。と。れ。お。と。り。勤。勞。も。一。生。懸。命。か。う。ふ。は。じ。と。是。處  
 拵。め。り。し。や。う。か。く。成。う。は。何。を。隠。さ。ば。し。令。子。之。十。兩。胸。巻。お。て。肌。あ。付  
 所。持。し。と。ん。衣服。もの。ら。び。相。波。し。と。ま。じ。今。爰。に。と。命。終。り。六。親。も  
 の。歎。れ。い。う。ご。かり。何。卒。命。は。助。け。多。と。し。り。と。ば。雲。八。か。て。へ。て。な。れ。終  
 殺。さ。ぬ。も。ほ。と。勘。定。げ。う。り。血。も。れ。ぬ。衣服。を。せん。より。其。侍。脱。せ。よ。や  
 公。得。し。り。と。元。多。く。な。と。は。後。お。廻。り。帯。解。ん。と。す。れ。所。を。お。も。と。さ。ら  
 ぞ。と。と。ひ。は。ち。南。無。不。動。と。お。り。さ。は。跡。跡。お。踏。倒。し。け。れ。は。嚏。と。お。り  
 直。お。今。一。人。の。拳。お。も。り。て。眉。間。と。打。を。眼。く。ら。み。く。倒。と。れ。その。隙。お。進  
 出。せ。ぬ。雲。八。怒。く。お。の。と。何。國。も。せ。も。道。は。じ。と。進。か。れ。闇。を。の。や。な。し  
 爰。れ。茅。原。か。と。の。木。れ。間。途。隠。と。り。れ。其。拵。音。お。き。れ。お。引。わ。く。太。刀  
 小。不。思。議。や。な。今。も。と。闇。た。空。暗。く。劍。の。光。う。と。日。月。れ。影。お。か。と。ら。ぬ



勘藏が既ひのやうく又きれ所へ宙へ飛んで又事侍走りかき  
雲八がと腕はうんぐ投退れ起のつて切かおを抜ながら拂のけ  
顔を見合せく扱こそ已とは雲八がうほびや。といふ間も後へ二人は  
下打くかおを身にかし首うち落と早業ふ一人と息杖切られて  
逃物と瓜し強装束ふ切倒せど此勢ひは雲八が靴ふおこや各世  
の太刀やら空も雲かきみ。赤火圍はし逃去り我夢ともわごと助虎  
と禰生とれとらあて扱もいりおれは方なればかお災難の救ひ  
なまのりしぞ。人間あてのよも有ほしと。手とめりせ伏拜みれば不審と  
かそれかじろの検見川村ふ住居しと浪人子原九津大夫とやきり  
公願のつと船橋神明へ月系り。今夕宿の入口ふおいて行らぐと  
旅傍のうへ見おりのれと其まうつれとまやとまや跡あてはし始

後のよりに這奴曲者我だがわれるのれが引と入て一詮議と跡りの追  
かけ身りしし取逃せし残念とよ扱と貴殿ふと我をゆらせし人里稀なる  
所ふおいしし切取またたくみみく者しはまの怪我もるりしやおまひ  
かけおこしし此場のらんど救ひのあとも宿世の縁と仁愛ぬうた言葉の端  
さととをまりう有かし足ととも神明の利生日頃念とと我成田山不動明  
王の加護ならと二洋九拜と終とびと拙者事は依倉の町あて柳を  
勘兵衛が務とおとりひの何卒大和田の定宿まて出下されはし  
委細と道ととめし上とと取落したれ抄拾ひ集めたはを夫と終とも  
大和田に流り。明と待と依倉を我家へ傳ひぬられ。  
**諷** 〇〇が〇〇が〇〇の〇〇  
扱も柳を欺ふ湯ととお流が危難の道也しも九津大夫が船なりと

忠臣蔵

夫れ小ほび料理馳走種しに及び一五日も伊津道あれしといひはたは  
 配かどけはしりおくら我お娘を宿小残し宿ばまぐく歸りし  
 ぞ。神明へ系指いささも。人成あやしおそれもあれを日成強く又高  
 めん其付こそ心世話小預りしを死とてそ日は宿へ帰るね好く翌日お  
 もなれば勤き清酒さうおを小者おとせせ勤を相付ひく九はたまさへ  
 尋ねゆき茶内ともみ内よりおはめれと声あく。誰そと答れさうを  
 十六七の娘の田舎にぞり器量かたが機織して居るれゆえ我へ伏倉  
 の町柳を勤き清と申者。伊在宿形くは目おからしと云われも只  
 今近所へありあり。やぐを歸すも間もあれは。先お好くへと機は空て  
 地炉小柴焚けけるどじり所へ元津大夫ゆりしゆ勤き清を越く云  
 中。寔に此やどの後件がいのれ親とも。御れの言葉やほしじだ。

付思し君の段思入りの事なれども松寸志の御礼の受納は下さなは  
 拙者小おわく此うに程なごは合と。金之拾五を返ししを元津大夫  
 ほしと是入る存けけ射礼な。伊子息の命は天より助せり  
 こそ知らびの人の身の人悪者連と見えれゆえ茶屋にて母はる  
 ぬ始終の親子我も詮議の筋あれど立戻つてその場へかけ付おさしを  
 寄ねね親依成救ふ。是天道の我をを飯なまけお所好しはや過分  
 の金子を合身おぶささゆにゆき。只此うを隔りて入魂いさか仁の道は芳  
 志の段清も同前この後おいて。伊重おも伊用捨小預るおじと恩を  
 させても夫ぞとはいそぬ色な山吹と包じゆにえ戻を。暮一つてお  
 きたる福ぞおとすじら羅該の衣おやりか。理次説て詣いのり。死まふ  
 は足悲もいりれど。勤兵清親子。なごもといささ。娘おはるの最お

忠孝傳 卷之二

十一





危れふあり須く棄ぶ。七の慎んく速なるん夏を欲ことなれ。八の  
 勤ふ須く相應ふとふし。九に彼強くの自保よ。十の我弱くは和を  
 取といふと。かやどの執行尋常の者との及ぶ所あわられぬ。いま  
 日本國中の名人上人の指針以て箒のうりに稀ありといふ。勤兵衛等も  
 夫を名人上人のゆかり。我お徒然の慰み。且ハ指針も清じと。盤  
 と先出とてさむれぬぞいふ。かやらけぬ。勤兵衛續く二番まじ  
 の多な津大夫帰らんとし。又盤に向ふ勝あうんとて。我徒然の慰み。且ハ指針も清じと。盤  
 あうんと酒食の就走して。又盤に向ふ勝あうんとて。我徒然の慰み。且ハ指針も清じと。盤  
 えくしは。老の我慢あうんと。一公不礼工夫とあじ。念ひぬ所人  
 見世より番頭の伊平次令子二十支持りてし。今日御屋舖  
 よりの白米の代金へ残す。玄米の代金二拾兩。酒の代金三拾兩。酒の代金三拾兩。

せりと見出せば。勤兵衛と其小技かこむ。何思ひし。わかれといふ。  
 くに取る事もあれ。とらふやうふと暫く考へ。イヤぢても取て。玄と  
 りつを聞くと。伊平次。なれ。あうんと。勤兵衛が手小渡し。と。盤面ふか  
 奪られ。夫より考四五斗。互ひ小技け。り。且。六。七。八。九。十。夫を  
 じく。ほ免めれと。厨へ。中。過て。ゆり。又。うら。が。終。小。負。と。あ。う。り。ぬ。  
 氣の毒ふあり。九津大夫。今。ま。じ。と。存。少。も。娘。さ。ま。事。房。川。里。見。  
 家へ。ま。ま。の。は。り。て。今。宵。松。あ。て。は。ら。ん。間。を。や。ぬ。い。と。ま。と。い。の。を。は。  
 押。し。め。四。番。の。け。け。負。の。身。り。残。念。な。れ。が。と。て。さ。め。此。夜。も。九。津。大。夫。  
 勝。を。た。よ。ふ。に。さ。う。れ。を。い。と。と。康。相。を。う。ら。し。て。負。た。れ。ば。主。人。も。さ。う。  
 よ。け。成。次。幸。ふ。夫。より。我家へ。ゆ。り。け。れ。勤。兵。衛。の。ま。の。ほ。け。を。  
 暗。さんと。盤。引。寄。せ。獨。基。と。て。の。工夫。を。せ。う。益。も。さ。ん。と。う。風。と。や。ひ。



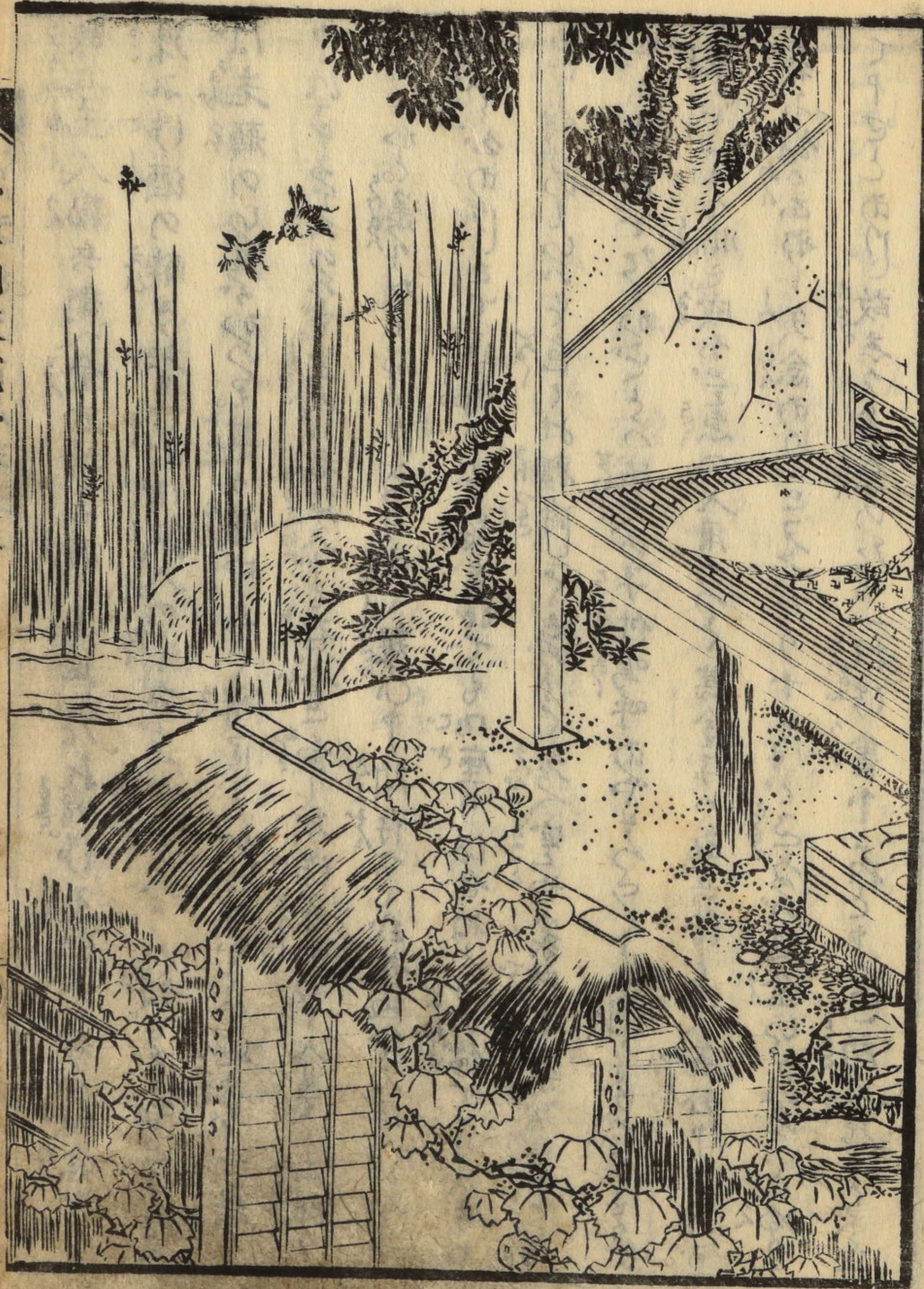
出にまは伊平次と号す。そのふら中一の拂ひ日勘定ハ相簿しやと云  
 其依ハ玄米の代むかり其基取致多ひたれ時金貳拾五圓とくしより  
 此後一もふせし成程税もたふもありしが。今思ひ出たれゆゑ  
 方小同叔と其不徳と云う忘却せしと夫より妻り病もりつもの令  
 算算戸棚の内子やあつた所不重しも知れどと掛けれども知れど  
 ば。ほことと隠居家同前の小座敷内等の者あつた何といひに  
 されりやと黙して言葉なれば伊平次もあま組志し考へり  
 中。仰のふと誰とても子ゆは私の存れりとし小声おわりて。その基の  
 席におして檀那あつた所な棄ちし由の内にしや九津太夫との業  
 ありてはたれとゆふ勘を傍へと遠くを脱したれりゆふそ元と歴々  
 此武士なればこそ悴が災難救ひ下され御礼ふ令子と拾五圓いら

せ。其場あつ返され秘の仁公たねまをばあれどかふとゆふ夫の此方  
 の公小競くの不問とすその元とともあれ今とはぐれた浪人の身よあつ  
 金とともぬも一物あれりかもあつた難儀を救ひとれり此方へ出入りあつた  
 我ととも貴拜しとてゆ見世もあつた檀那やを沙汰はしと時此實  
 物身も買ふらふに事とありひの対唐里の掛物があつた綱へしに價高金お  
 はかまつたと道具屋のいふふあつた此伊平次お入流のあつたゆがけ頼  
 とめた何の怪も存るも檀那の伊氣お障んかと遠慮はしはり者  
 急角との儀あつたてむにせしやうあつた。我あつた伊平次をなすれはしと  
 夫より検見川村へゆき所折あつた雨降る。九津太夫と勝手手に雨漏れ  
 あつた居りしが。是の何とて身りしとこのあ負の敵討おひえり云々  
 ぞ。なやうのゆふあつたと足はき座おけた四方山のとほしも何いおへん

あつて考へ居られ元来ねとらぬ。田舎者らの者なれば何事か辨へ  
なく。私とある外の義ありのほど。昨日主人方より基とらなすひり折柄  
つと金二十両おふとせり。此は存やとけり。九津をま成給。秘ま情  
のまへ派とせし。私入すなり。それが何とせしなれ中より心。されば基金子と人  
も清とるが。基とら海をよせ失念にせし。又あるとねあもうちが  
むさ。上は酒をどるあげらと餘念あり。とせしや。紙入の中より移と入  
りか。ばやとわらふ。如何にせし。是もほむ易れあふ。うけり。たくはりて  
なりと演じとば。九津大夫を顔色か。然らば基が懐中を尋じしとや。  
イヤ。なや。あやとゆに。い。い。い。側にお有合せ。主人。秘ま情。我。紙入とせし  
い。金置か。と。や。を。候。たと。二十。五。や。二十。五。の。金子。は。ま。あ。り。し。と。何。違  
背。の。つ。い。じ。し。は。遠。あ。ら。う。私。は。伊。断。下。され。し。と。利。に。も。に。言。す。る。と。あ。や

ららも。尤は。夫。面。色。青。く。なり。赤。く。なり。を。念。れ。拳。揚。り。は。暫。言。垂。も。あ。つ  
た。し。が。誠。や。瓜。田。小。履。沢。容。を。本。下。に。冠。を。正。と。と。の。聖。人。の。言。を。お。誤。り  
あ。や。ま。つ。な。も。成。を。我。亦。授。な。る。金子。の。入。用。お。付。秘。ま。情。の。へ。借。用。し。と。せ。い。が。  
基。亦。取。ま。ぬ。れ。失。念。し。と。せ。し。今。十。日。ほ。ど。こ。さ。あ。ら。う。急。度。返。弁。し。と。せ。し。と。宿  
へ。帰。り。て。す。れ。よ。と。い。ふ。伊。平。次。叔。と。と。あ。は。れ。に。入。り。し。は。其。後。あ。ら  
念。の。ま。一。札。を。持。帰。り。し。と。い。ふ。果。と。お。祈。り。け。侍。の。一。言。を。金  
鉄。より。も。か。じ。と。す。り。帰。り。て。其。旨。い。と。怒。り。け。れ。お。言。葉。あ。や。あ。れ。け。ん。  
そ。こ。と。ま。席。で。勘。兵。衛。お。い。わ。う。叔。擅。那。あ。ら。より。や。と。作。れ。と。い。ふ。し  
推。量。の。ま。い。く。合。み。の。九。津。を。ま。と。の。取。り。ゆ。り。ぬ。違。ひ。し。と。い。ふ。は。夫。を  
誠。と。し。只。の。ま。れ。と。叔。も。人。の。こ。ろ。後。の。知。し。ぬ。お。う。ま。訳。と。い。ふ。と。勘。兵。衛。が。い。ま。ご  
お。あ。ら。は。し。ね。伊。平。次。へ。て。り。願。お。私。が。智。恵。成。ぬ。う。ひ。不。成。と。い。ふ。と。お。あ。ら。ふ。

あつて考へ居られ元来ねとらぬ。田舎者らの者なれば何事か辨へなく。私とある外の義ありのほど。昨日主人方より基とらなすひり折柄つと金二十両おふとせり。此は存やとけり。九津をま成給。秘ま情のまへ派とせし。私入すなり。それが何とせしなれ中より心。されば基金子と人も清とるが。基とら海をよせ失念にせし。又あるとねあもうちがむさ。上は酒をどるあげらと餘念あり。とせしや。紙入の中より移と入りか。ばやとわらふ。如何にせし。是もほむ易れあふ。うけり。たくはりてなりと演じとば。九津大夫を顔色か。然らば基が懐中を尋じしとや。イヤ。なや。あやとゆに。い。い。い。側にお有合せ。主人。秘ま情。我。紙入とせし。い。金置か。と。や。を。候。たと。二十。五。や。二十。五。の。金子。は。ま。あ。り。し。と。何。違。背。の。つ。い。じ。し。は。遠。あ。ら。う。私。は。伊。断。下。され。し。と。利。に。も。に。言。す。る。と。あ。や



尾形傳次郎

七

昨日主人勘兵衛へ金貳拾五渡しませしに、時互ひ小基お旅念なく  
 殊お酒の酔もたれど、若紙入の中より、終入りの紙をとりて、  
 は先顔のり紙がかりと、某が懐中より、尋じしと、いふかの返答、イヤな  
 中へり、おまゝいひて、主人の裁紙入と存入を、一紙を、おまゝに、  
 ありしかと、羨りたり、はりしあり。中へ疑ひ、所存あり、貳拾五や、  
 陸、おのりして、違背すと、おまゝに、座り、はせねと、おまゝに、  
 くり、射の、もの、色く、れ、顔、附し、と、おまゝに、考へ、  
 賊お甲らと、た、か、ご、と、成人の子、供、鳴、呼、の、や、す、と、  
 事、と、し、と、悔、之、成、る、と、急、の、入、用、の、と、其、令、子、の、  
 暮、お、ほ、と、云、形、く、失、念、あり、と、おまゝに、十日、ほど、  
 て、せ、と、あり、故、お、まゝに、念、の、た、あ、一、札、  
 陸、お、の、り、して、違、背、と、と、おまゝに、座、り、は、せ、ね、と、  
 くり、射、の、もの、色、く、れ、顔、附、し、と、おまゝに、考、へ、  
 賊、お、甲、ら、と、た、か、ご、と、成、人、の、子、供、鳴、呼、の、や、す、と、  
 事、と、し、と、悔、之、成、る、と、急、の、入、用、の、と、其、令、子、の、  
 暮、お、ほ、と、云、形、く、失、念、あり、と、おまゝに、十日、ほど、  
 て、せ、と、あり、故、お、まゝに、念、の、た、あ、一、札、

武士のこころを、金鉄よりもかじ、速ゆつ、其音しく、前自讃と、  
 白眼つ、け、ら、せ、し、其、ま、う、は、と、は、て、播、那、の、  
 大、行、う、て、吐、と、め、ぞ、我、老、年、お、な、ぶ、と、ま、な、と、  
 も、お、ま、ま、の、言、葉、も、有、つ、た、お、ま、ま、強、さ、り、  
 拾、五、持、持、ま、せ、し、附、け、れ、し、お、ま、ま、の、心、  
 と、お、ま、ま、の、心、底、あ、り、何、二十、五、の、令、子、と、  
 ひ、い、ひ、返、し、た、れ、其、後、と、沙、汰、は、故、二十、  
 な、ば、い、ふ、さ、か、ひ、ひ、り、ん、と、い、ひ、れ、  
 の、や、ま、り、貴、人、高、位、の、と、め、お、ま、ま、  
 家、業、の、陰、に、親、人、の、志、お、ま、ま、  
 家、業、の、陰、に、親、人、の、志、お、ま、ま、

は所好ののへかきびも。沙汰さかびはと家内せりふし付とぞら  
るね斯く十日ほども過りば約束ふくを津をま達の道もけり  
の間お昔からね朱鞆の大小常にかりて案内して仁義小強と小倉  
おは穉泥一袴の股立ちも座舗へ通じば勘兵衛と只氣の毒あうら  
絶しおがりのみしく居られおたはを懐中より金貳拾五とり出し  
伊平次がよび付しあふ先日約定の通り金子持系おにしたり。その方  
中も念のため引合とてと勘兵衛おにじけはばと御意入りたれは皆  
淋珠さく先日仰せらばし付我亦暮らら負忘却し。伊平次とて  
ト入りお股何とらおほしめおとらさしりけれがそれのほたかひの役と斗  
あく言葉と外お並おたお女房より不沙汰おこされおぞ。侍酒一ッ  
とすしととも。今日を用事あり。おいと後々とを津をま苗でも苗らど

かつてけとば。伊平次を跡取えとて。扱めりもさされ侍もあるのね。  
人の金銀あつものも持て行く利はしお返そのみさるに不興あり  
かりしと。盗人猛勇あいはこの事。あし天狗おけられ一人を帰る  
とともおれぬし。此の子ばりとおぼつておきじ。天道さほのめぐみと  
おぼしめせとて笑ひたれを。勘を請制して声ごうにものりそ扱もまの  
毒なれとこれおれりのね。今も此令お進みはとらとも所詮うひまふ  
はじ。日おおはは。おとそめんと二日目もさうねと。お小憐勘義も旅  
より帰る右の次おおや。おとそめんとおとそめんと。おとそめんと。おとそめんと。  
大忍らけし人。此年うに捨とれどと早速九津太夫かへ尋ねはし。所  
と。戸開く答おれ人なげとば。近きありに。何と。用事あり。化風は  
と。帰宅のほどもおとそと。夫より勘を請もたつて。行ことなむ。

形れど行先もあつと知れどなり。とろふすれ内とや秋あもなれ筆真  
収地の耐希なまは村くしをしく。あつあはりせいで月日過  
ゆま。

*[Faint, mostly illegible handwritten text in a cursive style, possibly representing a letter or a diary entry.]*

忠考潮來武士卷之二終

